

# 保育学習における

## 中・高校生と幼児とのふれ合い体験

—送り手側の思いと受けて側の思い—

伊藤葉子

幼児とのふれ合い体験を通しての学び

昨今、小学校だけではなく、中学校でも高校でもふれ合い体験が盛んに取り組まれています。家庭や地域で、異世代と接することが少なくなってきた子どもたちに、教育の場でその機会を与えていかななくてはならないからです。

このふれ合い体験の種類はさまざまです。ただし、小学校では、ある時は、老人ホームにおじいちゃんやおばあちゃんを訪ねたり、ある時は、近くの養護施設の子どもたちと一緒に遊んだりと、対象は異なっていますが、目

的はいろいろな人々との交流とシンプルです。ところが、中学校・高校では、対象だけではなく、その目的もさまざまです。

ここでは「幼児」を対象としたふれ合い体験について考えてみます。昔からおこなわれてきたのが、家庭科の保育学習でのふれ合い体験です。生徒たちは、幼稚園や保育所へ行って、幼児と数時間一緒に遊びます。

この中での子供たちの学びについては、すでに本誌(二〇〇五年五月号)で以下の三点を挙げて論じました。

・小さい子について知ること・体験を通して、幼児の発達や生活について学ぶ。

・ 自分を知ること：幼児と遊ぶ姿と自分の小さかった頃の姿を重ね、自分の生い立ちを振り返ることで、

自分を見つめなおす。

・ 小さい子どもとの関係の中で、新しい自分に出会う：生徒たちは幼児と遊ぶ中で、幼児に受け入れられ、喜んでもらう体験をすることで、自分への有能感を高める。

ある男子中学生が、保育所でのふれ合い体験の後、このような感想を書いています。

「隣の席の〇〇（女子中学生）は、親戚に小さい子がいて、よく遊ぶらしい。小さい子ってやわらかいよねって言ったけど、意味がよくわからなかった。保育所にいて、子どもを抱っこしたとき、ああ、やわらかいってこういうことかと思った。手をつないだら、ぎゅって握ってきたから、頼られているなって思った」

この文章の中には、自分の肌を通して幼児を知る様子や、頼ってくれることを誇らしく思う気持ちが表れています。

## 送り手側の中・高校の家庭科の教師の思い

ここ数年、二か月に一回程度の割合で、中学校の家庭科の先生方と研究会を続けてきました。先日、幼児とのふれ合い体験が話題になった時のことです。出席の七人の先生方は、全て幼児とのふれ合い体験に取り組んでいます。家庭科の保育学習でのふれ合い体験の効果については、幼児への関心が高まること、保育学習への取り組みが意欲的になることなどが口々に語られました。しかし、その一方で、保育学習の中でふれ合い体験の実施に、かなり苦労していることがわかりました。その理由については以下のようなことでした。

・ 保育を学ぶ生徒全員が対象なので、クラス単位で行っていくとすると保育施設の規模が小さい場合には、人数が多すぎて受け入れてもらえないこともある（クラスを二つにわけて、同日同時刻に二つの施設にいくため、クラスの半分は他教科の先生方に引率を頼んでいる中学校もある）。

・ 授業時間が少ないため、授業変更をし、他教科の時

間をもらう必要がある。そのためには職員会議で書類を出して認めてもらうなどの手続きがたいへんである。



・一人ずつれていけないが、どの中学校も家庭科の教師は一人しかいないので、他教科の先生にも協力をお願いして、引率してもらう必要がある。

・クラス全員をつれていくため、中には、幼児に興味がない生徒もいる。また、家庭科の教師一人で大勢の服装の指導などの徹底をはかることに苦労する。

実際に、先生方は、前日まで、服装や態度の指導を重ねた上に、朝、集合してから、金髪の子の頭に黒のスプレーをかけたり、つれていってからも、遊んでいるうちにけがさせたりしないかと、ひやひやして、終わったらぐったりするという共通の経験をしていました。ただし、同時に、先生方から「でも、小さい子とふれ合うことで、保育の授業にもすごく意欲的になるし、感想文読むと、ずいぶんいろいろなこと学んでいるなと感じる。

だから、また、来年もがんばろうと思う」という言葉が共通に語られました。

このように、家庭科の保育学習のふれ合い体験において、学校に家庭科教師が一人しかいないこと、家庭科の授業時数が激減していること（たとえば、中学三年生では、二週間に一時間しかない）がハードルとなっているのです。

一方、最近では、職業体験（キャリア体験やインターシップと呼ぶこともある）としてのふれ合い体験、つまり、職業として保育にかかわる仕事を体験することが増えてきています。職業体験のほうは、学年全体の実施でも、数多い職種の中から、保育関係の職種の体験を希望する生徒は限られてくるので、十人以上のことはほとんどない上に、希望者であるため、意欲も比較的高くなります。

これらの目的や意識や人数が異なる体験を受け入れる側の幼稚園や保育所では、戸惑いがあると思われます。特に、保育学習のふれ合い体験について、どのように捉えているのでしょうか。

## 受け手側の幼稚園、保育所の先生の思い

保育学習のふれ合い体験について、幼稚園、保育所の先生方がどのように捉えているのか、前述の七人の家庭科の先生方が実施している保育学習のふれ合い体験を受け入れてくださっている幼稚園、保育所の先生方にお話を伺いました。ここでは、紙面の都合上、三名の先生方のお話の内容を抜粋して紹介します。なお、こちらの質問内容については適宜へ〜で簡単に示してあります。

### A先生（公立保育所所長）

〈保育学習のふれ合い体験をどう捉えているか〉

「うちは、中学生はもちろんのこと、高校生でも時には大学生でも、できる限り受け入れていきたいと思っっている。地域の学校の教育の手助けをしていきたいから」

へもっとこうしたらいいと思うことはないか〜

「せっかくなかきても、ほお〜と立っている生徒がいる。できれば、どんなふうにも子どもたちと遊ぶのか、イメージ

だけでもつくってきてもらいたい」

へ今の中学生は小さい子どものイメージをもっていないことも多く、どうやって遊ぶのかを考えることが難しい場合もある。人とのコミュニケーションがほとんどれない生徒もクラスに数人いるような現状である。そのような中で、中学の先生方もかなり苦勞して、それでも、意欲があるからつれてきているようだ〜

「こちらにも希望してきている場合（たとえば、職業体験など）などと、つい比較して、もう少しきちんと指導してほしいと思ってしまうようなところもあったかもしれない。職員の中にもそのような風潮がある。

保育学習の中でクラス全員を苦勞してつれてきていることを教えてもらって良かった。だから、そのような現状であることも、あらかじめ話してもらって、その上でどうしたら、より実りのある体験になるのか、中学校の先生と相談していきたい。職員とも、そのことを話して協力していけると思う。たとえば、大縄跳びの縄を回してもらっただけでも、普段なら、園児たちだけではできな

い。中学のお兄ちゃんやお姉ちゃんがきてくれたから、先生がいなくても大縄跳びができた……というように、園児が嬉しかったと思えるような体験にしていきたい」

B先生（公立保育所所長）

「保育学習のふれ合い体験をどう捉えているか」

「長い間、保育学習での体験を受け入れてきた。小さい子たちの純真さっていうか、ぴたっと気持ちの中に入ってくるところ、子どもってこんなに心がふれ合えるものなのかということを、中学生全員に、多感な時期に体験してほしい」

「家庭科の保育学習でクラス全員がくると、いわゆるやる気のない生徒もいることについては、どのように考えるか」

「私はそういう子でも、というよりそういう子こそ、来て、そんなにうまく遊ばなくてもいいから、子どもってこんなふうに元気に走っているのか、こんなふうに生活しているのかをみるだけでもいいと思っている。この施

設を使って小さな子とふれ合いのチャンスを保障するのは使命だと思っている。

親御さんたちをみていて、兄弟姉妹に囲まれて育ってきた人とそうでない人は明らかに違ってきているので、将来、親になる中学生や高校生の方にいろいろな形でふれ合う体験をしてほしい」

「職業体験が増えてきて、家庭科での保育体験が減ってきている理由などを話す」

「保育所では、中学・高校の教育制度や環境の変化というのはわからない。今日のように教えていただければ、教育が刻々変わってきていることを学べる。それは、ある意味で五年前と今の保護者の方たちの変化を知ることにつながる。

それから、中学生や高校生の様子を知ることでも大事である。彼らが、十数年後には親となって再び出会うことになるからである。同時に、彼らにできることをしてあげるといことは、将来の親になる人を育てることになる」

C先生（私立幼稚園園長）

「保育学習のふれ合い体験をどう捉えているか」

「うちは、若い女の先生が多いが、中学生のお兄ちゃんとお姉ちゃんとの遊びはダイナミックであり、それがとても楽しかったと言っている。幼稚園ではとにかく楽しいことが多いことが大切だと思っているので、うちにとつてもメリットは大きい」

「中学生がくると子どもが興奮しすぎるという意見もあるが」

「小さい子の生活は興奮の連続である。興奮することというのは、それだけ満足度も高いことだとも捉えられる。満足度が高いと次の活動にすんなり移っていける場合もあるし、人の話をよく聞けることにもつながる。満足度が高いということをいい意味で、次のことにつなげていきたいと思う」

「家庭科の保育学習でクラス全員をつれていくと、中にはやる気がない生徒もいる。何もしないで立っているだ

けの生徒もいるが、そのことについてどう思うか」

「その点については、中学生を幼稚園側がどうみるかという点にかかわってくると思う。」

中学生は教師ではないので、中学生を中学生としてあるがままに捉えて、それぞれが、それなりに伸びる場であってほしい。いろんな生徒がいていいと思う。何もしないで立っている子も、それなりの幼児に対する観察・理解は深まっているのではないか。何もしないで立っている生徒は、果たして、内面も何も感じていないだろうか、何かアクションしたいと思っているかもしれない。でも、今はうまくできないだけかもしれないという見方をもつことも大切ではないか、そのようにみていけば、こたえは違ってくるのではないか。教育はみんなでやるものだと思うっている。

中学生も、そして小さい子も、いろんな人とかかわってほしいと思っている。今はかかわることが少ないので、その機会をもたしてやりたい。そのためには、地域全体で、そのような機会を増やす心がけが大切だと思おう」

## ふれ合い体験における 送り手側と受け手側の思いをつなげる

このように、中・高校生と幼児とのふれ合い体験を支えているのは、送り手側の家庭科の教師たちの熱意と、受け手側の幼稚園・保育所の理解と協力があがるからに他なりません。この送り手側と受け手側の連携が、ふれ合い体験での学びの質を高めていくのだと考えます。その典型的な例として、ある中学でのふれ合い体験における中学生と保育士の方々とのレポートを通じての交流を紹介します。

この中学（研究会に参加の七校中の一校）では、保育所にいく前に、中学生はそれぞれ、自分なりの目的をもってふれ合い体験にのぞみます。そして、事後に実際に体験したことをもとに、その目的に沿ってわかったことを書き、レポートにし、保育所に提出します。保育所では、保育士全員が分担して、百五十名以上のレポートを目を通し、それに対して丁寧なコメントをつけてくれて、また中学校に戻してくれるという手立てをとって

るようです。以下『』が生徒の記述、イタリックが保育士からのコメントです。

### Dのレポート

◇テーマ・感情の表し方についてみてきたい

『二〜三歳くらいの子は散歩にいき、そこでは「泣いている」「笑っている」ところが目立った。他にもいろいろあるだろうが、この二つが主だと思った』

また、言葉で自分の気持ちを表現することができないので、泣いたり笑ったりが目についたのですね。でも同じ「泣く」「笑う」でも、気持ちは、それぞれ違うんですよ。

『五〜六歳くらいの子は、感情は豊かになり、今の僕たちと変わりが無いと思う。二歳からのこの三年間のあいだに、これだけの変化があるのかとおどろきがあった』  
そうですね。一人で学校にいけるように成長するんですね。

人間の発達ってすごいよね。

『保育所に入っている幼児期のあいだに感情は増える。一歳のころには、泣くしかできないだろう。しかし、卒園するころには、おとなに近くなるので、大事な時期だ

と思った。そして、いい勉強になった』

保育所の子どもたちを年齢別に観察して、よく捉えているのでびっくりです。幼児期までの発達は、もっともとおもしろいものもあるので、また、遊びにきてください。

## Eのレポート

◇テーマ…子どもはどんな遊びに興味をもつのか

『広場をみてみると、多少、年齢別・男女別でわかれているが、あまり関係なく遊んでいる。

四・五歳の子↓ドッジボールにはまっている様子、男女関係なくドッジボールは人気。外野の子はボールがまわってこないからか、友だちとおしゃべりしたり、砂いじりしたりしている。外野はボールがこないと何もすることがないのでつまらないだろう』

とてもよくわかります。私も外野組のほうだったので。子どもたちのそんな様子をよく観ていましたね。

『三歳の子↓男の子は砂場で、女の子は遊具で遊んでいる。かけっこ・リレーが好き。競うものが好きなのだろうか？』

競うことよりも、キャーとテンションがあがるのが楽しいみたいですよ。

『子どもはやっぱ元気がある。自分も小さい時はこんな感じだったのかなと思った』

子ども走り回ったりするのが好きな子とゆったりと過ごすのが好きな子という事です。

レポートの中には、あまり書かないまま提出されていたものもありましたが、その空白の部分埋めるかのように、保育士の方が保育所での幼児たちの様子を書いてくださったっていました。これを受け取った中学生にとつて、記憶の中にある幼児の姿と、そこに描かれている幼児が相重なることにより、体験を通しての学びが発展していくと考えます。

ふれ合い体験の必要性が唱えられ、さまざまな目的・形態の体験が実施されるようになった今こそ、それぞれの目的にあったふれ合い体験のあり方をもう一度考えてみることに、送り手側と受け手側の思いを重ね、その学びの質を高めていくことが必要でしょう。

(千葉大学)